大人にはわからない日本文学史（高橋源一郎）　＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

じゃあ、新しい音楽や新しい絵や新しい文学というものは、どこにあるんでしょう。

そんなこと知ったことか、というのが、わたしの唯一の考えだったのです。あるかもしれないけど、それはつまらないものに決まってる、とさえ思っていたのです。いったい、どうして、わたしはそんなことを考えるようになったのでしょう。

おそらく、Aそれは、わたしが学校で受けた歴史教育のせいだったのです。

古代から中世、（　1　）近代へ。「歴史」の中ではたくさんの事件が起こる。たくさんの偉大な人たち（ナポレオンに織田信長）が、次々現れて、新しい時代を作ってゆく。

（　2　）、「現代」に近づくほど、「歴史」の授業は加速度的につまらなくなってくる。偉大なものも、立派なものも、おもしろいものも、どんどん少なくなってきて、ついにはゼロになる。わたしは、「歴史」とはそういうものだと思うようになりました。（　3　）、昔ははやっていたけど、現在に近づくほどさびれてくるものだと。おもしろそうなものは、いつも過去にある。

立派なものや価値のあるものは、いつも過去にある。

それが、幼いわたしに、いつの間にか備わった考え方でした。

この「歴史」というものに関する独特の考え方は、わたしが作り出したものではありません。人類が、自分がしてきたことを整理し、理解するために、作り出したノーベル賞級の発明だったのです。

「現在」とは自分のことです。

少し古い「過去」とは父親（や母親）であり、もっと古い「過去」は祖父（や祖母）なのかもしれません。

父親（や母親）は、自分よりずっといろいろなことを知っているし、力もある。そして、祖父（や祖母）になると、想像できないぐらいいろいろな経験をした、立派な人だ。そんなふうに、人々は考え、「歴史」もそういうものだと考えることにしたのではないでしょうか。

けれど、今では、父親（や母親）や祖父（や祖母）への敬意はすっかりなくなってしまいました。Bこの「歴史」がなくなった、と言われているのは、もしかしたら、そのせいなのかもしれません。

もう一つ、これとは全く別の考え方も存在します。

最も古い「過去」は産まれたばかりの赤ちゃんみたいなものだ。何もかもが新しく、新鮮で、みずみずしさに満ちている。ちょっと古い「過去」になると、その赤ちゃんは成長して、青年になり、さらに大人になる。傷つき、自分の可能性を疑い、でも、少しずつ、経験を積んでゆく。そして、最後に「現在」に到達する。ボロボロで老いさらばえた姿になって。

一見、正反対に見える、C「歴史」に関する、この二つの考え方には、実は共通点が存在します。

それは、どちらも、時間というものは「不可逆的」だと考えている、ということです。

どんなに激しく求めても、「過去」は戻ってはこないのです。しかし、本当に、そうなのでしょうか？

わたしはもう半世紀以上も、たくさんの本を、とりわけ小説を読んできました。「現在」の小説を、ちょっと「過去」の小説を、それから、ものすごく「過去」の小説を。そして、ある日、わたしは突然、あることに気づいたのです。

それらの小説たちが、僕が聞いてきた評判とは、えらく違ったものであることに、です。

その「評判」というのは、D「文学史」という、「文学」に関する「歴史」の中での評判でした。「文学史」という「歴史」の中で、例えば、「過去」の小説たちは、時には、敬愛すべき祖父（や祖母）のように、時には、みずみずしい赤ちゃんのように、取り扱われてきました。どちらにせよ、遠い「過去」の出来事、というか、遠い「過去」に、もう死んでしまった知らない作家が書いた作品であることに変わりはなかったのです。

なんか違う、とわたしは思いました。

Eそれらは、祖父（や祖母）ではなく、赤ちゃんでもなく、よく知っている友達のような気がしたのです。

わたしは、文学をよく知っている人たちに、こう言いました。

「F『過去』なんてないんじゃないかな。五十年前も、百年前も、みんな今と同じようなことを考えて小説を書いていたんじゃないかな。小説は、進歩もしてないし、退化もしてないし、要するに、あまり変わってないんじゃないかな。なんか、そんな気がする。」

すると、その人たちは、こう答えたのです。

「なに、子どもみたいなこと言ってるんだい。『文学史』を読んでみなよ。そんなこと、どこにも書いてないぜ。」

わたしは、ずいぶん久しぶりに「文学史」というものを読んでみました。確かに、その人たちの言うとおりだったのです。

わたしが、自分で「文学史」を書こうと思ったのは、そのときが最初だったかもしれません。

わたしは、「過去」の小説を、その「評判」から取り戻そうと思いました。陳列されているガラスの棚から脱走するよう、説得してみることにしました。要するに、「過去」で眠っているのをやめ、起きて、現在に遊びにくるよう言ったのです。

そして、「現在」の小説には、その逆に、「過去」に行って、「過去」の小説と遊んでくるよう命じたのでした。

「歴史」というものは、鑑賞するために壁に掛けられた絵ではありません。なんと言うか、それを使って、誰も考えたことのないヘンテコなものを作り出せるg<u>オモチャみたいなもの</u>ではないでしょうか。いや、そうであるべきなのです。

問一　空欄部**1**～**3**に当てはまる語を、次の**ア**～**オ**の中から選び、それぞれ記号で答えなさい（重複して選択することは不可）。

ア　つまり　**イ**　ところが　**ウ**　しかも　**エ**　そして　**オ**　だから

問二　波線部**A**「それ」とはどういうことか。簡潔に説明しなさい。

問三　波線部**B**「『歴史』がなくなった」とはどういうことか。その説明として適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　過去の偉業を後世に残そうという動きがなくなったこと。

イ　歴史に残るような偉業をなしうる人がいなくなったこと。

ウ　成功しても尊敬されないので人が努力しなくなったこと。

エ　本来は残るべき記憶や記録が意図的に消されていること。

問四　波線部**C**「『歴史』に関する、この二つの考え方」とはどういうものか。それぞれ説明しなさい。

問五　波線部**D**「『文学史』という、『文学』に関する『歴史』の中での評判」を比喩的に表現した部分を、これ以降から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問六　波線部**E**「それら」とは何か。本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問七　波線部**F**「『過去』なんてないんじゃないかな」とはどういうことか。説明しなさい。

問八　波線部**G**「オモチャみたいなもの」はどのような意味で用いられているのか。その説明として適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　子ども達のためのもの　　**イ**　万が一壊れてもいいもの

ウ　古ければ古いほどいいもの　　**エ**　新しい発想を得られるもの

問八	問七	問六	問五	問四		問三	問二	問一
				・	・			1
								2
								3

学年
組
番号
氏名
得点

大人にはわからない日本文学史（高橋源一郎）　＊＊

〔出題の意図と留意点〕　問一、文と文の接続の確認。問二、指示語の内容確認。わかりやすい表現を心がける。問三、問四は前後の照応からの内容理解。問五、後半の比喩表現に着目する。問六、指示語の内容確認。問七、直前の内容をふまえて「過去」をどうとらえているかを説明する。問八、比喩表現の確認。

☆解答例と配点

問一　１　エ　２　イ　３　ア　〈２点×３〉

問二　筆者が、新しい音楽や文学はあったとしてもつまらないものに決まっている、と考えるようになったこと。〈６点〉

問三　ア〈４点〉

問四　・「現在」から見て「過去」の存在であるほど、知識や経験をもった立派な存在である。
・最も古い「過去」は新鮮でみずみずしい存在だが、「現在」に近づくほど老いていく。〈６点×２〉

問五　陳列されているガラスの棚（十二字）〈４点〉

問六　「過去」の小説たち（九字）〈４点〉

問七　小説は、今とは違う発想や考え方を、遠い「過去」の知らない作家が書いたものではなく、「過去」も「現在」も人の考え方は変わっていないということ。〈10点〉

問八　エ〈４点〉

計50点